

日语 词汇学 教程

朱京伟 编著

木村秀次(日) 校阅

外语教学与研究出版社

H363
29

日语 词汇学 教程

朱京伟 编著
朱利芳 校阅



外语教学与研究出版社
北京

图书在版编目(CIP)数据

日语词汇学教程 / 朱京伟编著. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2005.4
ISBN 7-5600-3642-2

I. 日… II. 朱… III. 日语—词汇学—研究生—教材 IV. H363

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2005) 第 020464 号

出 版 人: 李朋义

责任编辑: 刘永志

封面设计: 彭 山

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 北京京科印刷有限公司

开 本: 850×1168 1/32

印 张: 11.125

版 次: 2005 年 6 月第 1 版 2006 年 3 月第 2 次印刷

书 号: ISBN 7-5600-3642-2

定 价: 16.90 元

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

前 言

近年来，日语教学界出现了新的动向：大学本科毕业后继续攻读日本学专业硕士研究生的人迅速增加，不少高等院校在实施扩招计划的同时，开始把更多的精力投入到研究生阶段的课程设置的教材开发之中。日语专业成为热门已经有近 30 年时间了，中国的日语教学界正在迎来一个从单纯扩大规模向提高教学和研究层次转变的新局面。

本书的素材是编者在担任研究生的日语词汇概论课的过程中逐渐积累起来的，有了汇编成书的想法后，又对内容反复做了调整和修改，总想把平时学习研究的一些新收获随时增补进去。无奈学无止境，即使是现在，不少地方还是留有力不从心的痕迹。

日语词汇学的内容十分丰富，而且不断有新的论著和论文在日本出现。但是，由于教学环境的诸多不同，日本原版的词汇学概论书往往并不十分适合中国学生的情况。编者认为，编写面向中国学生的日语词汇学教科书，应在内容上和本国的汉语词汇学形成互补之势。比如，有些日语的词汇现象在我们母语里同样存在，可以不去多花费笔墨；另有些日语的词汇现象和母语的既相关又相异，就需要加以比较和区分；而对于那些中国人感到陌生的日语词汇现象，则必须条分缕析地讲清楚。基于这种

想法，本书设置了「和語」「漢語」「外来語と混種語」等章节，因为这样划分最能反映日语词汇的特性。把「漢字と仮名」「語彙の表記」等看似不属于词汇学范畴的内容编进书中，也是出于相同的考虑。此外，「擬音語と擬態語」「連語と慣用句」等属于能够直接体现日语文化特色的词语范畴，它们和汉语词汇之间的差异显而易见，因此也列出专章加以论述。

中日之间的词汇交流源远流长，日语词汇的形成和发展曾经长期受到来自古汉语的直接影响。因此，即使是探讨现代日语的词汇，我们也不应忽略中日词汇交流的历史线索。本书在对日语词汇作共时性描述的同时，尽可能地加入了一些历时性考察的要素，希望这样可以帮助读者获得关于日语词汇的更为完整的认识。

由于电脑的广泛使用，现代词汇学对词汇现象的描述比以往更加直观和准确，科学的量化分析已经成为词汇研究的基本方法之一。这种方法的运用既是 20 世纪 60 年代以来日本词汇学研究方面的一大亮点，也是今后汉语词汇学发展的必由之路。本书在有关章节处特意插进一些具有直观效果的图表，正是为了强调这种量化分析的方法。这些图表或许可以改变一些以往的成见，让我们领悟到词汇学研究并非只是一副枯燥乏味的面孔，而是可以贴近生活、充满乐趣的。

本书各章具有相对的独立性。附在每章之后的论著论文主要是编者所参考的资料，同时也兼有给读者提供研究书目的意图。使用本书时，可以在讲解每一章的概论内容之后，有针对性地选

择参考资料中的一两篇论文来研读，目的是在获得某方面的知识框架之后，再通过细读论文去进一步学习如何分析和解决某个具体问题。如果按照这种讲解概论和研讨论文并举的教学计划进行，全书大约可以使用一学年。

最后，我真诚地感谢日本千叶大学教授木村秀次先生。我与木村先生交往多年，因为研究的兴趣相近，经常彼此交换论文，互勉互励。这次，木村先生认真地帮我校阅了全部书稿，并提出了许多合理的修改建议。同时，还要感谢外语教学与研究出版社日语部的薛豹先生和刘永志女士，本书的顺利出版，离不开他们的大力推动和细致有序的工作。

编 者

2005年1月5日

目 次

第1章 語彙の概説.....	1
1. 言語の単位.....	1
2. 語の数.....	3
2.1 辞書の収録語数.....	3
2.2 語彙の実態調査.....	5
2.3 個人の語彙量.....	8
2.4 語数とカバー率.....	10
3. 語の分類.....	12
3.1 意味による分類.....	12
3.2 文法的性質による分類.....	13
3.3 語種（出自）による分類.....	15
4. 語種の形態.....	16
4.1 音形の特徴.....	17
4.2 語形の長短.....	18
5. 語種の量的分布.....	19
5.1 過去の語種の推移.....	19
5.2 現代の語種の分布.....	23
☞ 本章の参考資料.....	24
第2章 和 語.....	25
1. 和語の語種的特徴.....	25

2. 和語の品詞別分布	29
3. 和語動詞について	31
3.1 和語動詞の役割	31
3.2 和語動詞の語構成	32
3.3 和語の複合動詞	34
3.4 自動詞と他動詞	35
4. 和語形容詞について	38
4.1 形容詞の語数	38
4.2 形容詞の活用形式	38
4.3 形容詞の語構成	40
4.4 形容詞と関連する他の品詞	41
5. 和語副詞について	43
5.1 副詞の語数	43
5.2 副詞の語形	44
5.3 副詞の分類	46
5.4 副詞と他の品詞の区別	48
6. 和語の語構成	50
6.1 和語語構成の分類	50
6.2 複合語の語構成	51
6.3 派生語の語構成	57
6.4 畳語の語構成	61
☞ 本章の参考資料	64

第3章 漢語	65
1. 漢語の特徴	65
1.1 漢語の定義	65

1.2 漢語の語種的特徴	66
1.3 漢語の比率	68
2. 漢語の受容と創出	70
2.1 漢語の分類	70
2.2 中国製漢語の受容	72
2.3 和製漢語の創出	74
3. 漢語の造語力	77
3.1 既成漢語の語基による造語	77
3.2 既成漢語の省略による造語	78
3.3 既成漢語の複合による造語	79
3.4 接辞性漢語語基による造語	80
4. 漢語の語構成	81
4.1 二字漢語の中日比較	83
4.2 三字漢語の中日比較	89
4.3 四字漢語の中日比較	92
☞ 本章の参考資料	96

第4章 外来語と混種語	99
1. 外来語の特徴	99
1.1 広義の外来語と狭義の外来語	99
1.2 外来語の役割	100
1.3 外来語の分布	103
2. 外来語の歴史	105
2.1 外来語の流入時期	105
2.2 外来語の原語の変化	108
2.3 外来語はなぜ増えるか	110

3. 外来語と原語のずれ	114
3.1 発音のずれ	114
3.2 語形のずれ	117
3.3 意味のずれ	118
3.4 和製外来語	120
4. 外来語と在来語の関係	123
4.1 他の語種との関係	123
4.2 外来語の言い換え	126
4.3 外来語の動詞化とナ形容詞化	128
5. 外来語の表記	130
5.1 表記の沿革	130
5.2 語形のゆれ	132
6. 混種語	133
6.1 混種語の結合パターン	133
6.2 混種語の造語力	135
☞ 本章の参考資料	137

第5章 漢字と仮名	139
1. 漢字使用の歴史	139
1.1 漢字の伝来	139
1.2 古代日本語の漢字数	143
1.3 現代日本語の漢字数	144
2. 漢字の音と訓	145
2.1 漢字の字音	145
2.2 漢字の字訓	148
2.3 字音と字訓をめぐる諸問題	150

2.4 「常用漢字表」の音と訓	151
3. 国字と当て字	153
3.1 国字	153
3.2 当て字	155
4. 仮名成立の歴史	157
4.1 万葉仮名	157
4.2 万葉仮名から略体仮名へ	160
4.3 平仮名と片仮名の定着	161
4.4 いろは歌と五十音図	164
☞ 本章の参考資料	165

第6章 語彙の表記	167
1. 漢字制限と表記の改正	167
1.1 漢字表の制定	167
1.2 当用漢字と常用漢字	169
1.3 漢字調査の実施	171
2. 漢語の書き換えと言い換え	173
2.1 同音漢字による書き換え	173
2.2 同訓漢字による書き換え	174
2.3 表外漢字の仮名書き	174
2.4 漢語の言い換え	175
3. 仮名遣いの沿革	176
3.1 歴史的仮名遣いとは	176
3.2 現代仮名遣いの確立	178
4. 送り仮名の付け方	180
4.1 送り仮名の原則	180

4.2 原則よりも多い送り仮名	181
4.3 原則よりも少ない送り仮名	182
4.4 送り仮名の「ゆれ」	183
5. 振り仮名の付け方	184
5.1 振り仮名の歴史	184
5.2 総ルビとパラルビ	185
5.3 振り仮名の役割	185
6. 日本語のローマ字	186
6.1 ローマ字表記の沿革	186
6.2 現行のローマ字表記	189
6.3 ローマ字とワープロ入力	192
6.4 ローマ字表記の使い道	193
☞ 本章の参考資料	194
 第7章 擬音語と擬態語	195
1. 擬音語・擬態語の定義	195
1.1 擬音語と擬態語の区別	196
1.2 擬音語・擬態語と副詞	197
1.3 擬音語・擬態語と漢語	199
2. 擬音語・擬態語の形態	200
2.1 擬音語・擬態語の語数	200
2.2 擬音語・擬態語の音節数	201
2.3 語形による分類	202
3. 擬音語・擬態語の意味領域	203
3.1 意味分布の特徴	203
3.2 音と意味の関連	204

3.3 意味による分類.....	206
4. 擬音語・擬態語の文法的性格.....	208
4.1 後接パターンの種類.....	208
4.2 後接パターンの兼用と分布.....	212
5. 擬音語・擬態語の翻訳.....	214
5.1 擬音語の翻訳.....	215
5.2 擬態語の翻訳.....	215
6. 擬音語・擬態語の歴史的変遷.....	216
6.1 名称の定着.....	216
6.2 新旧語の入れ替わり.....	217
6.3 表記の変化.....	219
☞ 本章の参考資料.....	221
 第8章 連語と慣用句	 223
1. 連語と慣用句の定義.....	223
1.1 語連結と連語の区別.....	225
1.2 連語と慣用句の区別.....	226
2. 連語と機能動詞.....	227
2.1 機能動詞とは.....	227
2.2 機能動詞型連語の特徴.....	228
2.3 機能動詞型連語の役割.....	229
3. 慣用句の品詞的な特徴.....	231
3.1 動詞慣用句.....	231
3.2 形容詞慣用句.....	233
3.3 名詞慣用句.....	234
4. 慣用句の語彙的な特徴.....	235

4.1 身体語彙の慣用句	235
4.2 心情語彙の慣用句	236
4.3 漢語語彙の慣用句	237
4.4 外来語語彙の慣用句	238
5. 慣用句の形式的な特徴	238
5.1 比喩形式の慣用句	238
5.2 否定形式の慣用句	241
5.3 重ね形式の慣用句	241
6. 慣用句とことわざ等の区別	242
6.1 ことわざと格言	243
6.2 故事成句	245
6.3 ことわざと故事成句の現状	246
☞ 本章の参考資料	247

第9章 語の意味..... 249

1. 意味の体系	249
1.1 『分類語彙表』の意味体系	249
1.2 『角川類語新辞典』の意味体系	251
1.3 中国語の意味分類辞典	253
2. 語と語の意味関係	254
2.1 類義語	254
2.2 同義語	255
2.3 上位語と下位語	256
2.4 同位語	257
2.5 対義語	258
3. 意味分析の方法	260

3.1 意味特徴の抽出.....	260
3.2 場面と文脈の役割	261
4. 類義語の意味分析	263
5. 対義語の意味分析	265
5.1 用法の非対応	265
5.2 意味の非対応	266
5.3 肯定・否定の非対応.....	267
5.4 対義語の欠如	268
6. 意味の周辺.....	269
6.1 語の位相	269
6.2 男性語・女性語.....	271
6.3 専門語	273
6.4 語感	273
6.5 中日同形語.....	276
☞ 本章の参考資料	277
 第10章 辞書と語彙研究	279
1. 辞書の種類.....	279
2. 一般辞書	281
2.1 国語辞典	281
2.2 漢和辞典	283
3. 専門辞書	287
3.1 類義語辞典.....	287
3.2 用例・用法辞典.....	289
3.3 擬音語・擬態語辞典.....	292
3.4 ことわざ・慣用句辞典	294

3.5 逆引き国語辞典.....	296
4. 研究事典	298
4.1 特定分野の研究事典.....	299
4.2 語彙索引	301
☞ 本章の参考資料.....	305

付録

付録 1 常用擬音語・擬態語 110 語.....	307
付録 2 常用連語・慣用句 100 語.....	319

索引

事項・人名・書名索引.....	329
-----------------	-----

第1章 語彙の概説

1. 言語の単位

日本語の構造を考える際の単位として、文章・段落・文・語連結（連語・慣用句）・語などをあげることができる。語との関わりを中心に考えれば、特に「文」以下が重要な単位である。それぞれについて次のように定義しておく。

(1) 文

一定の意味を持つ句点から句点までの一続きの語。例えば、

この夏花子と太郎は海外旅行に行った。

朝から小雨がしとしと降っています。

(2) 語連結（連語・慣用句）

語と認定される単位が二つまたは二つ以上結びついたもの。例えば、

この — 本 厚い — 本 窓を — 開ける

花子と — 海外旅行に — 行く

などがそうである。語と語を結び付けて語連結を作る場合、その結合度にはいろいろな程度差がある。そこで、語の結合度の差によって、さらに、語連結を連語と慣用句に細分していくことができる。つまり、語と語の結合度が最もゆるいものを「語連結」と呼ぶなら、